フランスに派遣されて（上）

北川雅彦

平成二年度長期海外研究派遣事業により昨年の七月から今年の三月までの九月間、フランス南部のモンペリエ市にありますラングドック工科大学（モンペリエ第二大学）にて、研究を行う機会を与えられました。生物化学食品工学研究室に滞在し、ここのジャン・クロード・シェフテル教授とともに公私ともお世話になりながら、研究生活を送りました。シェフテル教授は、エクストルーダによる食品加工に関する研究では立派な業績を示されており、国際シンポジウムでは何度も座長を務められており、2月にはバルセロナで開催された食品学会へ議長として招かれていました。

さて、研究課題ですが、これはエクストルーダによる食品加工が中心で、実験に使用した材料は、フランスで生産されているマイワシすり身、大豆タンパク質（脱脂された後、タンパク質を分離または濃縮させたもの）、乳タンパク質、穀物タンパク質などです。エクストルーダはクレクストラル社（フランス）のBC四五型（二軸同方向回転）を使用しました。もともとエクストルーダはヨーロッパで発明された機械で、この機械による食品加工技術のノウハウも蓄積されているため、原料の選択から装置の組合せ、運転条件の設定、得られた押し出し物（エクストルーダにより処理されて押し出されたもの）の評価などについて検討を行い、どのようにしたら良いものが得られるのかについて研究を行いました。今回は移動中のハプニングやモンペリエでの生活などについてお話をしたいと思います。

モンペリエまでの移動計画は、アムステルダム経由で成田→アンカレッジ→アムステルダム→パリ→モンペリエで、当然のことながらすべて飛行機による移動でした。ところがアムステルダムに午前七時に到着し、一時間半後のパリ行きに乗り換えようと窓口で手続きをしたところ、「シャルル・ド・ゴール空港が職員ストライキのため欠航となったのでパリまでの航空券は国際列車乗車券に変更して下さい。」とのことでした。私は愕然としました。鉄道による移動などはまったく勉強していなかったので気が重くなってしまいました。重いと言えば持ってきた荷物で、スーツケース、ショルダーバック、書籍のはいった紙袋、ホットプレート（実験用に依頼されたもの）でこんなに持って列車には乗れないし、パリでの移動も不可能に近いのでスキポール空港横の郵便局から小包で教授宛に送りました。郵便局でもいろいろとあり、内容物の記載、保険の有無、配送できないときの返送先など一つ聞いて書いては順番待の最後に行くということの繰り返しで、二つの荷物を送るのに一時間もかかってしまいました。ホットプレートに限らず、電気製品は日本から送る場合は返送を条件とした本人使用以外では高額の関税が課せられますが、EC加盟国から送付したためフリーパスでした。また、ヨーロッパの空港ではダンボール箱を持っていると必ず中身が何であるのか税関が尋ねてきますし、開封を求める場合がほとんどです。私の場合も例外なくこのチェックを受けましたが、使用目的を説明して非課税で通関できました。

スキポール空港駅からデン・ハーグ、ライデンと乗継ぎ、パリ北駅に到着したのは午後七時でした。移動に必要な分だけトラベラーズチェックを現金に替え、南仏方面の列車窓口であるパリ・リヨン駅まで地下鉄で移動しました。とりあえず教授へ遅れたことの説明と謝罪のため電話を掛けようとしましたが、

コインで掛けられる公衆電話は何一つなく、すべてテレカルテ（テレホンカード）で掛けなければならないものばかりでした。キオスクを何店かまわり、ゴッホの自画像の描かれた一二〇度数九六フラン（約二七〇〇円）のカルテを見つけ、電話をすることができました。教授は連絡がないため心配していたようでしたが、事情を説明してその後の予定を相談しました。移動についてはもう遅いためTGV（フランス版新幹線）はないので、寝台列車でくるように言われました。ここでもちょっとしたトラブルがあり、不親切な窓口の駅員からモンペリエ行きの夜行列車のチケットを購入できたのは発車時刻の一〇分前で、乗車ホームを尋ねたところ「表示板で調べろ」とあしらわれてしまいました。時間も迫っていましたので、これ以上押し問答をしてもらちがあかないと判断し、その辺の人に尋ねることにしました。フランスの鉄道駅ではプラットホーム（Quai）と番線（Voie）にそれぞれ番号がつけられていて、数字しか覚えていないと、プラットホームと番線の間を右往左往する結果となってしまいます。三人目の気の良さそうなおじさんでやっと発車ホームを教えてもらうことができ、三〇〇m近くを一気に走り抜けました。列車に乗ることはできましたが、石畳のホームのためスーツケースのキャスターが破損し、押して動かせなくなりました。飲食物を調達しようと車掌に車内の売店を尋ねたところ、この列車には売店などないし、途中の停車駅でも買えないと言われてしまいました。仕方なく六人掛けのコンパートメントにもどり、パリ郊外の広々とした農村に落ちようとしている真っ赤な夕日を眺めながら、よくここまで来れたものだと自分自身に感心していました。とにかく非常にあわただしく、肉体の限界を越えた〝労働？〟をした一日でしたので、明朝の七時まではぐっすり寝ることにしようと思い、片側三人分の椅子をベッドにしました。幸いにもこの部屋にはスペイン系の非常に体格のよいおじいさんが一人いただけだったので、ゆったりと過ごすことができました。置引きにあいたくないのでパスポート、現金など貴重品のはいったセカンドバックを枕にすることにしました。しかし、真夜中の午前二時頃にとんでもないことがおこってしまいました。何かが髪毛に触れた感じがしたのであわてて起きあがると、見ず知らずのアラブ系の中年の男がこちらの正面に座っていました。泥棒だと直感したのでにらみつけてやるとどこかえ出ていってしまい、二度と帰ってきませんでした。同室のおじいさんはいませんでした。人気がまったくなく、しかも個室だったので首を締められて殺されたとしても誰もわからない状況だったと思います。自分の身は自分で守らなければならないと思い知らされました。話には聞いていましたが、まさか自分がこのような場面に遭遇するとは夢にも思っていませんでした。イタリア、フランス南部、スペイン方面を夜行列車で旅行する方はくれぐれもスリ、置引きにご注意ください。また窓口でチケットを購入する時、手荷物はしっかりと手に握りしめ、バッグなどは両足の間に置き、足ではさみこむことをお忘れなく。

たった一日の間に、これでもかというほどいろいろなことが起こりました。この先どうなることかと思いやられる反面、これだけのことを切り抜けてきたのだからどうにかやっていけるだろうという変な自信もわいてきました。モンペリエ駅で無事シェフテル教授と合うことができ、滞在先となるアパートに案内され、軽い朝食を食べてシャワーを浴びた後、時差ボケを直すために夕方まで寝ることにしました。休養後、次にしなければならないことは、食糧の買出しに出かけることでした。歩いて約五分の所に小さな食料品店（雑貨屋）、薬局、パン屋などがかたまってありましたが、品数が少ないのと開店時間が午前中と夕方となっていて利用しにくいでした。ただ、そこのパン屋で売られているバゲット（日本でいうフランスパン）はとても美味しいのでよく買い求めましたし、四か月後に来た妻と娘（生後七か月）がそこの女性店主と

友達になり（彼女も生後八か月の娘がいました）食事に呼んだり、呼ばれたりしました。バケットは外側が恐ろしく硬いのですが、とてもこうばしく内側は弾力のあるスポンジとなっています。塩味もほどよく、これだけで食べることができます。日本へ帰ってきてパン屋さんでバケットを求めるのですが、残念なことにまだフランスで経験した味、食感に並ぶものには巡り会っていません。もっと品数の多いスーパーマーケットに行くためには三〇分ぐらい歩かなければなりませんでした。そこではたいがいの物は揃っており満足できる店でした。一般に手に持つ買物かごはほとんどなく、キャスターの付いたかご付き手押し車（カート）を使わなければなりませんでした。このカートは店外の駐車場に重ねて置かれており、それぞれ、前後が鍵で連結されています。使用するときに取っ手の部分に一〇フラン（三〇〇円）コイン一枚を入れると鍵が前のカートからはずれて自由になります。返却するときはこの逆を行うと一〇フランコインが戻ってきます。こうすることによりカートはいつも所定の場所に返却されることになるので、カートを整理する人手もいらなくなり、合理化されています。小型のスーパーマーケットは午前八時三〇分から午後〇時、午後三時三〇分から午後七時三〇分、ハイパーマーケットと呼ばれる大型店では午前一〇時から午後一〇時まで昼休みなしで開店しています。大きな買い物バッグなどは入口カウンターにあづけることになっており、店内には私設警備員が目を光らせていました。特に湾岸戦争時には金属探知機によるボディーチェックとバッグの中身の検査がありました。

モンペリエ市ですが、人口約二一万人のフランス第八の都市で、パリからＴＧＶでおよそ五時間、飛行機で一時間のところにあり、エロー県の県庁所在地となっています。北海道の北見市や旭川市とほぼ同緯度にありますが地中海性気候のため冬も暖かく過ごせます。市中心部には一七世紀前後に造られた石造りの建築物が多く、なかでもローマ時代に架けられた水道橋は観光名所となっています。市内には一三世紀創立の医科大学（第一大学）工科大学（第二大学）、ポール・ヴァレリー（隣町セート出身の有名な詩人）と呼ばれている文科大学（第三大学）があり、大学生数は五万五千人と人口の四割を占めています。また、モンペリエ市のあるラングドック地方はワイン生産量がフランス国内第一位だそうですが、ぶどうの品質がそれほど良くないため、良質のワインはできないそうです。このため、地元にあるフランス国立農業研究所ではこの地方に適した良質のぶどうを作るための品種改良試験を行っています。近郊にはリゾート海水浴場があり、またダンス祭や音楽祭などの催物も夏期に集中するため、夏のバカンスシーズンには長期滞在する多数の観光客によりにぎやかな都市となります。

大学の研究室には午前九時までに出勤し、帰るのは午後六～七時ぐらいでした。昼休みは二時間あり、職員はほとんど自宅へ戻り食事をとっていましたが、私は自家用車がないので大学院生やアルゼンチンからの研究員などと学食で昼食をとりました。昼間からワインやビールを飲んでいる人が多かったので、私も何度か挑戦してみましたが、午後の仕事に気合いが入らなくなるため飲む習慣はつきませんでした。エクストルーダは研究室と同じ建物にはなく、そこから三Kmほど離れたパイロットプラントに設置されているため、何度も両者の間を往復しなければなりませんでした。研究室で行ってきたことや、フランスでの生活についてもっと詳しく報告したいと思いますが、それはこの次号に載せていただくことにします。

（きたがわ　まさひこ）